2006. 1. 10

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

JALD 日本LD学会会報 第55号

事務局：栃木県カウンセリングセンター内
〒320-0851 宇都宮市鶴田町687-9 ムギショウビル2F TEL.028-649-0090 FAX.649-1213
URL. http://wwwsoc.nii.ac.jp/jald/

アセスメント雑感

吉備国際大学
藤 田 和 弘

アセスメントという用語は、研究分野のみならず、教育現場においても知らない人がいないくらい浸透してきている。適切なアセスメントの実施には二つの要件が満たされていなければならない。アセスメント手段とその活用の仕方である。

ＬＤ児をはじめとする軽度発達障害児のアセスメント手段の代表的なものに知能検査がある。知能検査はいわば知能を測るものさしであって、このものさし自体が狂っていては話にならない。精度の高いものさしが不可欠であり、これを作成するのは研究者の仕事である。最近の傾向として、知能検査の多様化と改訂のスピード化があげられよう。以前は、個別式検査といえば、ビネー式とウエクスラー式のみであったが、近年K-ABCやDN-CASなどの新しい検査が登場してきた。また、これまでは、古くなった知能検査の改訂は約25年ごとに行われてきたが、現在ではその間隔が５～10年位短縮されている。米国ではWISC-Ⅲの改訂版としてWISC-Ⅳ、K-ABCの改訂版としてK-ABCⅡが標準化され利用に供されている。そして、これら二つの検査とも、内容的にかなり様変りしている。WISC-Ⅳでは、伝統的な言語性IQや動作性IQに代って群指数が中心的な指標となった。K-ABCⅡでは、適用年齢が12歳から18歳まで延長され、継次処理・同時処理の理論に加えてプランニングや結晶性・流動的知能の理論モデルが導入された。両検査とも、子どもの認知特性を多面的にアセスメントできるように改訂されている。我国でも、DN-CAS、WISC-Ⅳ、K-ABCⅡの標準化が待たれている。

いくらよいものさしができても、それを活用する検査者側に、正しい検査の実施と結果の処理、そして適切な解釈が行える知識と技術が備わっていなければならない。知能検査の多様化、改訂のスピード化、そして改訂された検査の内容面での精緻化に直面して、ユーザーの方は戸惑われるであろう。今後ますます知能検査の選択肢が増えることは望ましいことにちがいないが、それだけユーザー側からすると、しっかりした選択眼をもってアセスメント手段を選択し、賢いアセスメントを行うことが求められよう。